

2024(令和 6)年度東京分室 PD 研究員個人研究成果報告

個人研究

現代日本における葬送儀礼と 僧侶に関する研究 — 首都圏の事例を中心に —

研究代表者・元東京分室PD研究員 磯部 美紀
(社会学)

本研究の目的は、現代日本の葬儀に僧侶が関与する意味はいかに見出されるのかを宗教社会学的な観点から明らかにすることである。2024 年度は特に、首都圏の開教寺院では葬儀を介して人々との関係構築がいかになされるのかを検討した。具体的には、1990 年代に首都圏で宗教活動を開始した浄土真宗 R 寺の事例をもとに、僧侶がいかに今日の死をめぐる状況に対峙しているのかについて、葬儀に着目することで考察した。研究方法は、浄土真宗 R 寺の住職および門徒への聞き取り調査と寺院行事の参与観察から得たデータの分析である。以下ではその概要を示す。

はじめに、「個人化」の概念を補助線にして、死をめぐる現代の状況を宗教・死別・家族の3つの観点から整理すると次のように示せる。まずは「宗教の個人化」により、家代々の宗教から一代限りの宗教への移行が認められる。また「死別の個人化」により、かつては集団内で共有されていた死別の悲しみを、個々人がそれぞれ引き受けなければならない事態が進行している。さらに「家族の個人化」の進展により、弔い手のいない「ひとり死」が特殊なものでなくなりつつあり、家墓を次世代に引き継いでいくことも困難になることが、死をめぐる現代的状況として指摘できる。

次に、人口移動と寺院の関係を論じる先行研究を参照する。宗教学者・藤井正雄は「宗教浮動人口」の概念を用いて、人々の移動に伴い寺院をとりまく状況が変化していく様子を分析している。藤井は、都市には特定の寺院との関係を有さない宗教浮動人口が増加する一方、農村は人口流出により従来宗教界を支えてきた農村的基盤の危機に陥り、とりわけ深刻な影響を受けたのは浄土真宗であること、こうした変化を受けて寺院に残された機能は信仰教化の機能と檀徒の先祖供養のための葬儀・法要の機能であることを指摘する。

では、人口移動に伴う変化に対して、都市寺院はどのような課題を認識してきたのか。首都圏における真宗大谷派の動向に注目してみると、人口比において寺院数が不十分であること、人々と平時からの関係を有

さないことなどが課題視されている。こうした課題を受けて始められた活動の一つが都市部における開教寺院の設立である。開教寺院の多くは、既存寺院と異なる地域で展開されてきた。

ここからは、開教寺院の1つである浄土真宗 R 寺の宗教活動を事例にして、前述の死をめぐる現代的状況にいかに関係が向き合っているのかを考察する。その結果、次のことが示せる。まず「宗教の個人化」については、門徒以外を含む遺族との向き合い方が焦点になる。先行研究と同様に、R 寺の場合もまた、人々との関係性構築の契機は多くは近親者の死に際した葬儀の機会である。そのため、窓口役となる葬祭業者と良好な関係を築くことができるか、また葬式を縁に出会った人々と継続的な関係を築けるかが鍵となる。人々からの信頼獲得のために R 寺住職が重視したのは、宗教施設の設置と葬儀依頼時の丁寧な対応である。次に、「死別の個人化」に関しては、死者および遺族との向き合い方が重要である。身近な死者を想起する場として、寺院や納骨堂といった宗教施設のほか、死者供養の色彩が濃い寺院行事が機能することもある。また R 寺住職の法話では、浄土真宗の供養観をもとにして、死者と生者の死別後も続く関係性が示されていると言えるだろう。最後に、「家族の個人化」に対しては、遺骨の取り扱い方が焦点になる。R 寺では、納骨堂を設置している。また、門徒のみならず、葬祭業者や福祉施設から依頼される納骨も行っている。これを通して R 寺は、家代々の墓を守る人がいない場合であっても遺骨の行方を不安視せずに済む場を提供している。

反対に、「今日的な死」の状況に対して、僧侶が十分に対応できていない点はどこか。都市開教から30年を経た R 寺の抱える困難の一つは次世代との関係構築である。世代間の継承を前提とせずに一代限りの関係を中心に展開してきた寺院だからこそ、既存の寺院以上に次世代との関係構築が困難な状況が見受けられる。また、都市部において人々との関係構築の契機は葬儀・納骨が主であるが、その際に、浄土真宗の教義と「無宗教」性とのバランスをはかることの重要性が浮き彫りになった。

なお、上記の内容は、「寺院における葬儀を介した関係構築—浄土真宗 R 寺に注目して—」(第97回日本社会学会学術大会、2024 年 11 月、於：京都産業大学)というタイトルのもと口頭発表した。